

ある安息日に、イエスが麦畑を歩いておられたとき、弟子たちは穂を摘み、手でもんで食べた。すると、ファリサイ派のある人々が、「なぜ、あなたがたは安息日にはならないことをするのか」と言った。（ルカ福音書 6：1～2）

イエスは言われた。「あなたがたに尋ねるが、安息日に許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか。」そして、一同を見回してから、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。そのとおりにすると、手は元どおりになった。（ルカ福音書 6：9～10）

ある安息日、主イエスと弟子たちは麦畑を歩いていて、弟子たちは、空腹だったのであろう、穂を摘み、手でもんで食べた。主イエスの宣教団に律法違反の落ち度はないかと監視していたファリサイ派の人々は、ここぞとばかりに、「なぜ、あなたがたは安息日にはならないことをするのか」と言った。空腹の旅人が穂を摘んで食べることは許されていたが、何の労働もしてはならない安息日に、穂を摘み、手でもんで食べたことが、律法違反の労働に当たると詰め寄ったのである。笑い話のようなことであるが、ファリサイ派の人々は厳格に律法を遵守すべきであると説いていたからである。主イエスは、「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。神の家に入り、祭司のほかには食べてはならない供えのパンを取って食べ、供の者たちにも与えたではないか」と答えられた。ダビデは、サウル王に命を狙われ、逃避行中、パンに飢えた。神殿に行き、パンを求めたところ、祭壇に供えられたパンしかなかった。このパンは祭司しか、食べてはならないものだった。しかし、そのパンを食べて飢えをしのいだ。律法に反し、命を保ったのである。主イエスは、律法は人を生かすためのもので、人が律法のためにあるのではないと言われた。当時の律法がいかにも人を縛って、不自由にしていたかが分かる。5節に、「人の子は安息日の主である」と書いているが、これは、主イエスの言葉ではなく、イエスが主であるという信仰に立って、主イエスが律法を解釈する権威を持たれる方であるという、原始教会の信仰告白である。

他の安息日に、主イエスは会堂で教えておられた。そこに、右手の萎えた人がいた。律法学者とファリサイ派の人々は、主イエスが安息日に病気を癒す労働をするかどうか窺っていた。主イエスは彼らの考えを見抜き、手の萎えた人に、「立って、真ん中に出なさい」と、会堂の中心に立たせた。そして、「あなたがたに尋ねるが、安息日に許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか」と問われた。どんな日でも、人を救うことが良いに決まっている。彼らは答えることができず、会堂は静まり返った。主イエスは一同を見回し、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。すると、主イエスの言葉通り、彼の手は元どおりになった。

律法学者とファリサイ派の人々は、彼の右手が回復したのに驚き、嫉妬を持った。律法遵守を厳しく説く自分たちの立場が危うくなったので、分別を失っていった。そして、主イエスを何とか、やり込めようとする怒りに燃え、亡き者にしようとして話し合った。

規則は、人間が共に生きるためには必要である。しかし、その規則が自由を奪い、更に苦悩を押し付けるものであってはならない。自分たちの作った体制が壊されることを恐れ、規則で縛り上げることは、いつの世でも見られる人権無視である。